

## 中古漢語の文法特徴

— 仏教經典『六度集經』中の語気詞について

邱 旭 元

### 1. 研究背景

#### 1. 1 漢訳仏教經典について

漢訳仏典というのは、非漢語の原語から漢語に訳された仏教經典のことである。

仏教は外来の宗教として、主に、「方便説法」と「伝経送宝」という形式で布教され、口語を通して当地の言語に訳され、仏教經典が成立した。そのために、このような新しい文体、所謂仏教文学用語が生み出されたのである。

仏典の漢訳は後漢代に始まり、唐宋代まで盛行した後、衰退へと向かった。これらの文献は中国本土の文献には見出し難い文法現象、語彙、音訳字を大量に含み、漢語史資料として高い価値がある。仏教經典中の漢語文法現象に関する研究を通して、漢語文法の変遷と進化の過程を窺い知ることが可能である。

#### 1. 2 『六度集經』について

『六度集經』は『大正新修大藏經』（大蔵出版社、1922—1934年、『大藏經』と簡称される）に収録され、呉の康僧会によって紀元252年中国六朝の歴代の都である建業（三国の呉においては建業（けんぎょう）と呼ばれた）において訳された仏教經典である。『六度集經』はそのストーリーの点で優れ、そのテキスト中には、すでに当時の当該地域における口語の資料も大量に保存されており、三国時代の言語現象を如実に反映していることで知られている。

#### 1. 3 語気詞について

語気詞は語気の表現を手助けし、同時に語調の変化によって色彩を追加する機能を有している。一般的に、常用語気詞の機能は豊かであり、楊樹達『高等語文』によれば、「也」には八種類の用法があり、「矣」には七種類、「焉」には六種類、「乎」には五種類、「哉」には三種類、「耶（邪）」には五種類あるとされている。語気詞の機能について、一般的に「也」は主に判断語気を表し、「矣」は新しい物事の発生を表し、「耳」は制限語気を表し、「それだけ」の意味である。「焉」は提示語気を表し、話し手の話が事実であるということを提示する。「耶（邪）」は疑問語気を表す場合、話し手の想定が加わり、「乎」の語気に比べ弱い。感嘆を表す場合、「哉」の語気は強い。「夫」はしばしば吟唱の気持

ちを表す文に使用され、「哉」の感嘆語気ほど激しくない。

また、語気詞は多くの分け方が可能であり、大別すると次の二通りになる。一つは、文中の位置によるもので、句頭、句中、句末に分かれる。このような分類は伝統的分類法であり、王力、楊樹達などの研究者によって主張されている。もう一つは文の語気によるもので、陳述、疑問、命令（願望）、感嘆という四種類に分けられる。しかし両者には大きな見解上の相違もあり、本稿では後者の語気による分類方法を基準にしたいと思う。

## 2. 『六度集経』中の語気詞の整理と分析

### 2. 1 語気詞：「也」

「也」は『六度集経』中で最も多く使われている語気詞であり、上古漢語の機能をほぼ保持している。「也」は主に判断語気を表すが、言語環境によっては、ほかの語気を表す場合も多くある。

#### 2. 1. 1 陳述文の末尾に位置する場合

##### 2. 1. 1. 1 判断語気

「也」の用法は中古まで発展しており、判断語気をメインとして表す点において変化していない。判断文は陳述文の一種であり、人物と物事の状態と様子に関して、主語の部分と述語部分の間にもどのような関係があるかを判断する文である。上古漢語の中、最も典型的な判断文の句式は：「主語＋名詞述語＋也」である。

例①：夫虎，肉食之類也。【第一卷菩薩本生】

（肯定判断文）

訳文：虎と言うと、肉食類の動物だね。

例②：吾是天帝釈，非世庸人也。【第二卷 須大拏經】

（否定判断文）

訳文：私は天帝の釈と言い、世の中の凡人ではない。

##### 2. 1. 1. 2 確認語気

「也」の確認語気に関する用法は、陳述された物事の真実性と確實性を表し、陳述文の句末に位置する。最も多く見られる句式は：「陳述＋也」である。肯定陳述文中の「也」は後続文を誘い出す機能もある。否定陳述文は否定的な確認語気を表す。

例③：山半有樹，樹葉緻厚而柔軟也。【第二卷波羅捺國】

王經】（肯定陳述文）

訳文：山の途中に木があって、この木の葉は分厚いし、柔軟である。

例④：全己害民，賢者不為也。【第一卷 長壽王本生】

（否定陳述文）

訳文：自分を成就させるために庶民を害す。これは賢者たちが為さないことだ。

##### 2. 1. 1. 3 解釈語気

##### 2. 1. 1. 3. 1 原因を解釈する

「也」は動作と行為の原因を解釈する語気を表す。下記の例文は「不敢有之」の原因を解釈し、文中に「故」とともに用いられ、「也」の解釈語気を強める。

例⑤：身逮家寶捐之於世，已當獨逝，殃福之門未知所之，

睹世如幻，故不敢有之也。【第一卷 國王本生】

訳文：家にはたくさんの財産があっても、世の中に寄付

する。死に直面する時には一人だし、災が来るか福が来る

かも予想できないし、世の中のことも変化し過ぎるの

で、財産を所有すると災いがある。

## 2. 1. 1. 3. 2 目的を解釈する

目的文の先行文は行為または状態を表し、後続文の句末の「也」は目的を強調する。「以」とともに用いられ、目的性を強める。

例⑥：普施念曰：“斯含毒類必有害心，吾當興無蓋之慈以消彼毒也。”【第一卷普施商主本生】

訳文：普施は「彼は毒類のものを持ち、きっと人を害す心がある。私は蓋が付いてないような仁慈で彼の毒を消すべきだ。」と話した。

## 2. 1. 1. 4 列挙語気

「也」は言語の平行構造にも使用される。固有の語気のほかに、並列複文の前後文間の関連性と呼応性を表す。以下の2例は両方とも論点を列挙して論証する文である。句末の「也」は前後文の関連性を強化し、前後呼応の対照形式も示している。

例⑦：母登觀揚聲曰：“夫逆之大，其有三矣。……斯一也。……斯二也。……斯三也。”【第三卷國王本生】

訳文：お母さんは登って眺め、「あの逆無道は三つがあり、その一つは…二つは…三つは…」と高い声で言った。

例⑧：“夫欲升天者，當歸命三尊，……斯一也。……斯二矣……斯三矣……斯六矣。”【第八卷鬚羅太子本生】

訳文：あの昇天したい人は、三尊（仏、法、僧）に帰依すべき、…これは一つ、…これは二つ…これは三つ…これは六つ。

### 2. 1. 2 疑問文の末尾に位置する

「也」は疑問文の句末に使用され、疑問語気を表す。

#### 1. 2. 1 「誰」、「どこ」、「どれ」のような疑問代名詞を用いた疑問を表す。

下記の例文の「何」は場所を指し、「どの」という意味である。疑問代名詞「何」は句末の「也」とともに、疑問語気を表す。

例⑨：今欲返國。由何道也。【第一卷 長壽王本生】

訳文：今、国に戻りたい、どの道に行くか？

#### 2. 1. 2. 2 反問を表す

「可」、「豈」などの副詞とともに用いられ、反問語気を表す。

例⑩：何不放鬆，可離斯痛也。【第一卷貧人本生】

訳文：何で寿命から手を放さないのか？この痛みから離れるので。

### 2. 1. 3 命令文又は、願望文の末尾に位置する

#### 2. 1. 3. 1 命令語気

例⑪：王重敕曰：“無令羸老在道側也。”【第七卷太子得禪】

訳文：王はもう一度「弱い老人を道に遺棄しないでほしい！」と敕令した。

#### 2. 1. 3. 2 願望語気

例⑫：願大王疾相誅除重患也，身死神遷，惡意不生。【第一卷長壽王本生】

訳文：王様の病気を全部除去し、体が死んでも、精神が戻り、悪気が生まれぬのを祈る。

#### 2. 1. 3. 3 忠告語気

例⑬：妻即頌其義曰：“無自辱也。”【第四卷長者本生】

訳文：妻は彼の良い義理を賛美し、「自分を辱めないでください！」と言った。

### 2. 1. 4 感嘆文の末尾に位置する

感嘆文は喜怒哀楽などの感情を強化し表す文である。『六度集経』中の「也」による感嘆文は以下の1例しか存在しない、悲しみと驚嘆の気持ちを表す。

例⑭：呼號且言：“彼是鬼也！非梵志矣！”【第二卷須大 訳文：泣き喚きながら、「彼は悪魔だ。梵志ではない！」  
拳経】 と言った。

## 2. 2 語気詞：「矣」

「矣」も『六度集経』の中で、よく用いられる陳述語気の語気詞であり、上古漢語中の基本用法を継続し、新しい発展がなかった。さらに、「也」によりその機能を占有された。そのために、「矣」の使用例がしだいに減少し続け、最後には、「矣」は同じ機能を持っている過去形「了」に取って代わられた。

「矣」と「也」の最も大きな違いは、「矣」は変化を表し、過去文と未来文にも使えるので、時間性と関係があるのに対し、「也」は変化とも時間性とも関係がない点である。

『六度集経』中の「矣」は以下の多様な語気も表せる。

### 2. 2. 1 陳述文の末尾に位置する

#### 2. 2. 1. 1 判断語気

『六度集経』中の「矣」は判断語気を表す語気詞「也」の役割と同じく、判断文に使用され、語気詞「也」の判断役割機能に取って代わり得ることが分かる。

例⑮：理家又曰：“夫身，地水火風矣。”【第三卷理家 訳文：理家はまた言う「体は土、水、火と風だ」。  
本生】

#### 2. 2. 1. 2 確認語気

「矣」の事実確認の用法は中古時代に現れてきた。この用法は「也」の役割に相当し、上古時代には存在しなかった。「矣」は変化から得た結論を強調し、主観的な語気を強める。これに対して、「也」は叙述または描写から得た結論を強調し、主観的な語気表現の点で弱い。下記の例文の先行文は「矣」によって、「斯福若海」を確認し、後続文は「也」によって、「斯福猶地」を確認する。「矣」と「也」は両方とも確認語気を表し、前後呼応して、対称的な文ができている。

例⑯：斯福難量，其若海矣；難稱，其猶地也。【第三卷 訳文：この福は計量しにくいし、海のように、秤量しに  
沙門本生】 くいし、大地のようだ。

### 2. 2. 2 疑問文の末尾に位置する

『六度集経』中の「矣」の疑問文の例は少ない。

#### 2. 2. 2. 1 是非問

例⑰：婦曰：“子歎彼賢足，照子否矣？”【第四卷普明 訳文：夫人は言う「あなたは彼が十分賢明だと讃嘆し、  
王経】 彼はあなたに気を配ったか？」

#### 2. 2. 2. 2 反問

例⑱：當以何物，令汝置鴿，歡喜去矣？【第一卷薩波達 訳文：あなたを喜んで行かせるなら、何を以ってあなた  
王本生】 の鴿を置いておくことなどとてもできないの？

### 2. 2. 3 命令文又は、願望文の末尾に位置する

「矣」が命令文又は、願望文の末尾に使用された場合、主に、命令、願望、請求、忠告などを表す。『六度集經』は仏教經典であり、忠告と説得を行う状況が多く存在する。下記の例は願望を表す。

例⑱：吾不如早畢於今，無遺後患矣。【第五卷六年守饑畢罪經】 訳文：私は今、早く死んだ方がいい、後顧の憂いを残したくない。

## 2. 2. 4、感嘆文の句末に位置する

「矣」が感嘆文の末尾に使用された場合、主に、判断語気を強める。下記の例文は「信」という動作を主観的に強調する。

例⑳：王曰：“善哉，信矣！”【第八卷鬘羅太子本生】 訳文：王は「素晴らしい！信じる！」と言った。

## 2. 3 語気詞：「焉」

上古時期から、「焉」は次の四つの用法で用いられる：①疑問代名詞、「どこ、どのように」という意味；②語気詞、事実を表す；③形容詞語尾；④兼詞。

「焉」の疑問代名詞の例文：焉能動太山乎。（卷第一）訳文：太山を動かせるか？

「焉」の兼詞の例文：禍，吾當濟焉。（卷第一）訳文：私はこの災禍を済ませる。

### 2. 3. 1 陳述文の末尾に位置する

『六度集經』の「焉」は全て陳述文の末尾に使用され、確認語気を表す。疑問文、命令（願望）文または感嘆文には現れない。「焉」を陳述文の末尾に用いた場合、莊重感が現れる。

例㉑：元氣ㄨ者為地，軟者為水，暖者為火，動者為風，四者和焉，識神生焉。【第八卷察微王經】 訳文：気の強いのは大地、軟らかいのは水、暖かいのは火、動くのは風、この四つが睦まじくて、心の意識がこの中に生まれる。

## 2. 4 語気詞：「乎」

語気詞「乎」は主に、疑問語気を表す。

### 2. 4. 1 疑問文句末を位置する。

#### 2. 4. 1. 1 「誰」、「どこ」、「どれ」のような疑問代名詞を用いた疑問を表す

疑問代名詞が存在する疑問文は聞き手に疑問点についての回答を求める。この種の疑問文では語気詞は必ずしも使う必要がなく、語気詞が用いられた場合それは文の語気を強調し、「か」と訳すことが可能である。

例㉒：王曰：“若為誰乎？”【第五卷屬提和梵志本生】 訳文：王は「あなたは誰のためか？」と聞いた。

#### 2. 4. 1. 2 是非問を表す

この種類の疑問文の特徴は疑問代名詞を使わない点にある。文全体の疑問点に対して、「是」か「非」かの回答を要求する。このような疑問文は最も単純な聞き手の疑問を伝える文であり、通常「か」と訳される。

例㉓：王曰：“爾等睹青地乎？”對曰：“見之。”【第四卷頂生聖王經】 訳文：王は「あなたたちは青い大地を見たか？」と聞き、「見た。」と答えた。

## 2. 4. 1. 3 反問を表す

反問は疑問の気持ちが弱く、むしろ独白的な表現を強化するためのものである。「乎」の反問文では「豈」、「其」、「寧」、「焉」等の副詞とともに用いられることが多い。一般的に否定副詞（否定の意味を持つ副詞：不、没、無、非等）が存在していないが、語意が否定的であり、句末の「乎」は「か」と訳される。

例㉔：菩薩報曰：“豈有施徳而入太山地獄者乎？”【第一卷菩薩本生】

訳文：菩薩は「徳道を布施する人はなんで太山の地獄に入るのか？」と知らせた。

例㉕：天王處深宮之κ，焉知微蟲之處斯乎？【第六卷修凡鹿王本生】

訳文：天王はずっと深宮の中に住むので、卑しい虫がここに居るのを知っているのか？

## 2. 4. 1. 4 選択を表す

この種類の文の特徴は二つ並列的な是非文を連用し、聴き手に二つ中の一つを肯定的に回答することを求める。文末の語気詞「乎」は「ね」と訳される。下記の例文は「耶」と「乎」が前後呼応し、選択語気を表す。

例㉖：耆艾對曰：“善哉，問也。王將欲以斯身升天耶？以魂盡乎？”【第八卷鬚羅太子本生】

訳文：耆艾は「いい質問だね！王様はこの体で昇天するか？或いは、魂で昇天するか（という質問は）？」と回答した。

## 2. 4. 1. 5 推測を表す

推測語気は半信半疑の語気を表し、一般的に、陳述文と疑問文の間に存在する。提示された疑問に対して、聴き手は回答しても回答しなくても、かまわない。推測、推断の気持ちを表し、「乎」は文中の「其」などの副詞と呼応する。相手の意見を求め、句末の「乎」は「か」あるいは「かな」と訳される。

例㉗：經歷山嶮乏食有日，兩兄各雲：以婦濟命，可乎？”【第四卷國王本生】

訳文：山の中で、いろいろな困難があり、食物もなく、このような状況が何日も続き、二人の兄弟は各自に言う「この婦人の命で私の命を救うのはいいかな？」

## 2. 4. 2 感嘆文の末尾に位置する

反問文は強烈な肯定的な語気を表すため、感嘆文に転化されやすい。

### 2. 4. 2. 1 一般的な感嘆文

以下の例は形容詞の「快」に関する感嘆の気持ちを表す。

例㉘：數服高名，久欲相見，翔茲快乎！【第四卷頂生聖王經】

訳文：長い間にずっと会いたかった有名な方たちと会えて、本当に幸いだね！

### 2. 4. 2. 2 特別な感嘆文

「乎」は感嘆文中にも使用可能である。感嘆の気持ちを表すほかに、後続文の誘い出しの機能も担う。このような例文は下記の1例しか存在しない。

例㉙：王曰：“善哉！奇乎佛之至化，乃令廁臭化為栴檀矣。”【第四卷普明王經】

訳文：王は「いいね！仏さまの力は本当に不思議であり、トイレの悪臭を栴檀の香りに変化させた！」と言った。

## 2. 5 語気詞：「耶」（「邪」）

「邪」は上古時期から「耶」の「通仮字」であり、同詞異字の表現方法もある。「耶」は未定的な疑問語気を表す。『六度集経』の中、「耶」はよく用いられるが、語気詞「邪」はすべて「邪悪」という意味で、「耶」は「邪」を取替えたものである。

名詞「邪」の例：王還治國以正不邪。（卷第四）訳文：王様は国に戻り、正しい方法で国を治め、怪しいことをしない。

## 2. 5. 1 陳述文の句末に位置する

『六度集経』中、「耶」の陳述文の例文は下記の1例しかなく、確認語気を表す。

例㉓：童子曰：“ 巧吾金錢二枚，以雇渡耶。”【第四卷 童子本生】 訳文：男の子は「（あの人は）私に金錢二枚をくれ、私を雇って、彼を（対岸に）渡してあげた。」と言った。

## 2. 5. 2 疑問文の末尾に位置する

### 2. 5. 2. 1 「誰」、「どこ」、「どれ」のような疑問代名詞を用いた疑問を表す。

「耶」による疑問文は驚きの気持ちを表す。

例㉔：阿群曰：“ 何謂耶？”【第四卷普明王経】 訳文：阿群は「何と言う？」と言った。

### 2. 5. 2. 2 反問を表す

「耶」による反問文では「豈」がよく現れ、前後呼応する。

例㉕：答曰：“ 斯婦豈有惡耶？”【第二卷須大拏経】 訳文：答えて言う「この婦人は何で悪を持っているのか？」

### 2. 5. 2. 3 推測を表す

例㉖：“ 爾父不賂太山王耶？” 對曰：“ 眾聖之書，唯佛 教真。”【第六卷童子本生】 訳文：「あなたの父は太山王を賄賂しないのか？」「様々な聖書の中、ただ仏教が真実だ。」と答えた。

### 2. 5. 2. 4 選択を表す

『六度集経』中、「耶」による選択語気を表す例文はこの「耆艾對曰：“ 善哉，問也？王將欲以斯身升天耶？以魂靈乎？”（訳文は例㉗を参考にする。）」1例しか存在しない。「耶」は「か」、「ね」と訳される。「耶」と「乎」は選択を表す点で機能が同じである。

## 2. 6 語気詞：「耳」

「耳」は戦国後期からよく使われてきた語気詞であり、主に陳述文の制限語気を表す場合に用いられる。命令文と願望文の用例は少なく、感嘆文には現れない。

名詞「耳」の例文：吾當開其耳目除其盲聾。（卷第一）訳文：私は彼の目と耳を開き、目の見えないと耳の聞こえないのを取り除くべきだ。

## 2. 6. 1 陳述文の末尾に位置する

### 2. 6. 1. 1 判断語気

『六度集経』の中、判断語気を表す陳述文は下記の2例である。用法は「也」に近いが、語気が比較的弱い。

例㉗：夫財幣、草芥之類耳。【第二卷須大拏経】 訳文：あれはただの貨幣、ちり芥等みたいなものだ。

例㉘：群臣諫曰：“ ……，爾乃可為天下王耳。”【第四卷普明王経】

訳文：多くの臣下は「…、（してこそ）あなたはやっ と天下の王になれますよ」と諫言した。

## 2. 6. 1. 2 確認語気

「耳」は上古時期には、「大したことではない」という気持ちを表すのみであったが、中古時期には、強調、肯定などの語気を表す機能も現れてきた。「…わ」と訳せる。

例⑳：菩薩曰：“吾聽王耳。”【第五卷屬提和梵志本生】 訳文：菩薩は「私は王様に聞いわ。」と言った。

## 2. 6. 1. 3 解釈語気

### 2. 6. 1. 3. 1 原因を表す

例㉑：天帝驚曰：“愚謂大王欲奪吾比特，故相擾耳”。 訳文：天帝は「私は王様が私の比特を奪うと思い、従って、邪魔したので！」と驚嘆して言った。

### 2. 6. 1. 3. 2 目的を表す

例㉒：吾今當七分爾尸，以謝七王耳。【第八卷遮羅國王經】 訳文：私は今、あなたの死体を七つに分け、これで、七人の王に謝る。

## 2. 6. 1. 4 制限語気

「耳」は「矣」と同様、「大したことではない」という気持ちを表す。「耳」は「唯」、「惟」、「但」等とともに用いられ、制限語気を強調する。

例㉓：逝心曰：“唯欲王首耳。”【第一卷幹夷王本生】 訳文：逝心は「私はただ王に従いたい。」と言った。

## 2. 6. 2 命令文又は、願望文の末尾に位置する

『六度集経』中、「耳」による命令文の語気の軽微な表現の例が存在する。

例㉔：令梵志體重ト天女靈歇耳。【第八卷鬚羅太子本生】 訳文：梵志の体を重くさせ、天女の魂を休ませる。

## 2. 7 語気詞：「哉」

「哉」の主要な機能は純粋な感嘆を表すことであり、感嘆文に用いられる。

### 2. 7. 1 疑問文の末尾に位置する

「哉」の基本的な機能は感嘆語気の表現であるが、語調（イントネーション）と言語環境（コンテキスト）の影響を受け、疑問語気のニュアンスを表すようになっている。

#### 2. 7. 1. 1 「誰」、「どこ」、「どれ」のような疑問代名詞とともに疑問を表す。

例㉕：海神悔怖曰：“斯何人哉？而有無極之靈乎！”【第一卷普施商主本生】 訳文：海神は「この人は誰なのか？無限の魂を持っているのか！」と恐れて言う。

#### 2. 7. 1. 2 反問を表す

「哉」は主に、感嘆語気を表すが、弱めの感嘆語気を表す反問文にもよく使用される。副詞「豈」、「其」等とともに用いられ、反問語気を表し、感嘆の気持ちも弱めに表している。しかし、感嘆文に比べ比較的弱い。

例㉖：天神下曰：“爾為忍苦，其可堪哉？”【第一卷貧人本生】 訳文：天神は「あなたは苦しみを我慢するために、耐えられるのか？」と伝えた。

### 2. 7. 2. 命令文又は、願望文の末尾に位置する

『六度集経』の中下記の1例しか存在しない。忠告する語気を表す。

例㉗：夫崇惡禍追，施德福歸，可不慎哉！【第四卷童子本生】



訳文：悪を崇拜すると災禍に追いかける。道徳を布

施すると福が附いてくる。慎重にしたほうがいいよ！

### 2. 7. 3 感嘆文の末尾に位置する

例④：王曰：“誠哉，斯言也。”【第一卷國王本生】

女人求願經】

訳文：王は「この話は本当に誠意があるね！」と言った。

訳文：皆は「いいね！いいね！あなたが得たね。」と感嘆した。

例⑦：眾佑歎曰：“善哉，善哉！令汝得之。”【第六卷

嘆した。

### 2. 8 語気詞：「夫」

句頭語気詞「夫」は『六度集経』中の最も主要な提示語気詞である。一般的に指示代名詞と語気詞という二つの役割を担う。指示の役割が弱まると、語気詞に転化する。

「夫」が実際に名詞「夫」の意味を持つ例：夫人服之。眾疾皆愈。（卷第三）訳文：夫人が（薬）を飲んで、全ての病気は治った。

### 2. 8. 1 陳述文の末尾に位置する

#### 2. 8. 1. 1 議論と後続文の引き出し

対応する表現は現代漢語には存在しない。「例①：夫虎，肉食之類也。」という例文は物事としての「虎」という話題を引き出す。（訳文は例①を参考にする。）

#### 2. 8. 1. 2 「若夫」の場合

「若夫」は「夫」と「若」がともに用いられたもので、後続文の議論を引き出し、「もし…と言うと」と訳される。話題を引き出し、叙述を展開する。

例④：若夫今日aa生男女，貴而且賢。【第五卷童子本生】

訳文：もし今日、子供を産むということ（＝生むならば）、（お母さんは）賢くて貴い。

#### 2. 8. 1. 3 確認語気

『六度集経』中、「夫」が確認語気を表す例文は下記の1例しか存在しない。

例④：禍之大莫尚十惡。福榮之尊。夫唯十善矣。【第五卷釋家畢罪經】

訳文：災禍は大きいけれども、十悪までいかない、福と栄誉の尊貴は、ただ十善にしか相当しないのだ。

### 2. 8. 2 感嘆文の句中に位置する

『六度集経』の中4例しか存在しない。すべて「痛夫」を使い、主述倒置句であり、苦しみを表す。

例⑤：痛夫斯人！不睹佛經而為斯惡。【第五卷菩薩本生】

訳文：この人を酷く残念に思う！仏教経典を見ずに、このような悪をした。

## 3. まとめと今後の課題

### 『六度集経』中、常用語気詞機能のまとめ

語気	陳述文						疑問文					命令（願望）文			感嘆文	総用例数
	判断	確認	解釈	列举	制限	議論	疑問	反問	是非	推測	選択	願望	命令	忠告		

也	○	○	○	○			○	○				○	○	○	○	362
矣	○	○						○	○			○			○	342
焉		○														32
乎							○	○	○	○	○				○	314
耶(邪)		○					○	○		○	○					16
耳	○	○	○		○									○		48
哉							○	○						○	○	75
夫		○				○									○	80

以上の表からみると、「也」と「矣」の機能が最も豊かであったが、「焉」、「夫」、  
と「哉」の機能は比較的単調であることが分かった。

『六度集経』の中で、「也」、「矣」、「耳」、「焉」は主に陳述文に使用され、確認、  
解釈などの語気を表す。語気詞「也」は最も幅広く用いられる。語気詞「耳」は制限語気  
を表すほかに、確認語気なども表すことが可能である。しかし、「耳」の機能は上古時期  
に拡張され、「矣」の機能にも進出した。この変化が生じた原因は「也」と「矣」の使用  
頻度が中古時期から減少してきたことにあると考えられる。また、「也」の機能は最も豊  
かであり、生命力も強い。「矣」、「耳」、「焉」は機能の面である程度共通しており、  
お互いの使用頻度により影響を受ける。「乎」、「耶(邪)」と「哉」は三つとも反問語  
気を表し、反問語気に関して普遍性が存在する。「焉」、「夫」、「哉」の機能は比較的  
単調であり、そのためどんどん衰退していく状況にある。以上の事実が今回の考察により  
浮き彫りにされた。

本稿では『六度集経』の語気詞の使用状況を簡単に整理した。今後、同時代の文献の比  
較研究を行いつつ、中古時代の語気詞に関する通時研究と共時研究を行ったうえで、変化  
の傾向とその原因も明らかにしたい。

参考文献：

- 『先秦語気詞新探』郭錫良 古漢語研究 1989年
- 『魏晉南北朝漢語研究』程湘清 山東教育出版社 1992年
- 『試論佛典翻譯對中古漢語詞彙發展的若干影響』朱慶之 中國語文 1992年
- 『高等語文』楊樹達 北京教育出版社 1994年
- 『古代漢語』王力 中華書局 1999年
- 『大正新修大藏經』大藏出版社 2001年
- 『古漢語疑問賓語詞序變化機制研究』松江崇 好文出版 2010年
- 『早期漢譯佛經的來源與翻譯方法初探』李ち 中華書局 2011年
- 『馬氏文通』馬建忠 商務印書館 2013年